

結城哲彦さん追悼文

結城さんと言ったら、「鶴髮童顔」という中国の成語が頭に思い浮かぶ。「鶴髮童顔」とは、髪は丹頂鶴の羽毛のように白いが、顔色は子供のように赤々としているという意味で、年をとっても丈夫で元気のいい方に対する褒め言葉である。それは結城さんに初めて会った時のイメージであり、そして最後に会った時に残されたイメージでもあるので、先日お亡くなりになられたと聞いた時に非常に驚いた。

結城さんに初めて会ったのは大学院の最初のゼミであった。結城さんから声をかけられて、日本に留学してきたばかりで知り合いのいない私には心が暖かく感じられた。そして七十代の方であり、私達と一緒に大学院を通っているのを知って感服した。

結城さんに対して最も印象深くそして最も感謝すべきなのは、私の論文に対する指導であった。日本に来て二年目で論文を書くことは思ったより大変であった。一番困っていた時に結城さんに助けられて、五時間休まずに指導していただいたこともあった。指導が終わった時、私は腰が痛くて立ち上がれなくなっていたが、結城さんは疲れた顔一つ見せなかった。お陰様で、結城さんのご指導を踏まえつつ一週間ぐらい家に閉じこもり、ようやく論文の草案を仕上げることができた。

最後に結城さんに会ったのは学位授与式であった。博士ガウンを着ている結城さんは非常に若々しく見えた。

結城さんとの付き合いはただ二年間であったが、たくさんの優しさをいただいた。「鶴髮童顔」の結城さんは私の心に永遠に残っている。どうか安らかに眠りください。